

## 「氣の確立 中村天風と植芝盛平」 藤平光一 著（東洋経済新報社）



新川クリニック 宮城 政剛

思い返せば幼いころから武道に親しんできた。柔道、沖縄相撲、空手、合気道と多芸は無芸を地で行っていると言われてもしょうがないのですが、成長の過程で様々な素晴らしい先生方に出会う機会を頂き指導して頂いた。社会的風潮の影響も多分に受け、パーソナルトレーニングが全盛期であり中学生のころからバーベルを持って筋トレを行い、そのことが強くなることの第一前提であった。当時は肉体的なパワーの下に技があるという考えを信じて疑うことはなかった。その考え方は、大学時代に出会った空手を始めてから少しずつ変わってきたように思う。その空手を指導していただいた方は、サイ、ヌンチャク、エーク、カマヌンチャクを使いこなす典型的な古武道空手の先生であった。しかし、非常に考え方の柔軟な方で常に新しい空手を作りたいと腐心されていて、注目していた武道の一つが合気道であった。その先生に紹介され合気道の講習会に参加し、また本を読む中で出会ったのが「氣の確立」副題、「中村天風と植芝盛平」である。この本を契機に藤平光一先生の本を読み漁り、今までのスポーツ、武道への考え方が180度転換するような衝撃を受けることになる。この本ではインドでヨガの修行を通じて奔馬性結核（原文より引用）を克服した天風会の創始者である中村天風先生と大東流合気柔術を修得し、自らの武道を合気道とし、それを世に広めた植芝盛平先生と藤平先生の関係の中で体験したこと、また藤平先生自身の自叙伝的な内容となっている。

自叙伝の中で面白いエピソードがある。藤平光一先生本人も慶応大学生時代に結核を患い負担のかかる運動は一切禁止。そして一年間の療養生活を余儀なくされ、一旦は床に伏し療養することになる。このままで一生を終わりたいと考え、ひたすらに本を読み、縁あり禅宗と

神道系の修行を行う一九会（いちくかい）を知り、そこでの修行を通じて結核を克服したという経験を持つ。

植芝盛平先生からは「リラックスの大切さ」中村天風先生より「心が体を動かす」ということを学び、この教えを元に「氣の研究会」を立ち上げマイナスの考えをプラスに転ずる方法、リラックスの大切さ、心が体を動かすという教えを広めることとなる。

藤平先生が修行したのは、第二次世界大戦前後、この本の中から、その時代の修行の仕方をうかがい知ることでもできて面白い。中村天風先生からは、直接言葉で「ころろが体を動かす」と教えられ、植芝盛平先生は、ただ技を実践して見せるばかりで、一度も手取り足取り教えてもらったことは無かったと言われている。自分が持っている疑問を常に持ち、どうすればうまくなれるかに集中し両先生に師事し修得した。また言い方を変えれば極意を盗んだと言ってもいいでありましょう。縁があり、氣の研究会で長年修行した先生方に合気道を指導して頂き、更に話を聞く機会に恵まれ、そのことを聞いてみると、合気道に限らず物事は「自得」の世界であると教えて頂いた。これは何も武道の世界のみに限ったことではなく、どの世界でも目指すものを持ったものの修行のある姿であると感動したことを覚えている。

しかしながら「氣の確立」、氣の研究会の合気道（現在は心身統一合気道会）の教えは、本を読んだだけでは到底分かるものではなく、体験を通じて体得するものと理解している。宮本武蔵は「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とする。これを鍛錬と言う」と言っている。この本を手に取り十数年、修行とはそのようなものであると実感を持って感じている。